



イギリスの十大都市名 - 由来と姓への影響

木村, 正史

(Citation)

神戸大学医療技術短期大学部紀要, 3:165-178

(Issue Date)

1987

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/80070062>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80070062>



イギリスの十大都市名——由来と姓への影響

木村正史

はじめに

Houghton Mifflin 社発行の *The 1986 Almanac* によると、イギリスの十大都市と人口は、1位 Greater London, 6,765,100; 2位 Birmingham, 1,017,300; 3位 Glasgow, 761,000; 4位 Leeds, 716,100; 5位 Sheffield, 545,800; 6位 Liverpool, 510,700; 7位 Bradford, 464,700; 8位 Manchester, 458,600; 9位 Edinburgh, 444,700; 10位 Bristol, 399,600の順になっている。ただし、人口統計は1982年のもので、推定数であると断っている¹⁾。

イギリスの公式名は the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland (グレート・ブリテンおよび北アイルランド連合王国)であるけれども、上記の都市はすべて Britain 島にあり、Northern Ireland の都市が一つも含まれていない。惜しいことに北アイルランドの首都 Belfast は *Guinness Book of Answers* (1982) によると12位である²⁾。たしかに十大都市はブリテン島に集中しているが、詳細に見れば、その殆どが England に集まっていることが判明する。すなわち London, Birmingham, Leeds, Sheffield, Liverpool, Bradford, Manchester, Bristol の8都市である。これに対して Scotland には Glasgow と Edinburgh の2都市があるだけで Wales に至っては一つの都市も見当らない。Wales の首都である Cardiff は24位で、282,000の人口をもっているにすぎない³⁾。

ところで上に掲げた十大都市名を言語由来別

に分類すると、ケルト系とアングロ・サクソン系になる。前者には London, Glasgow, Edinburgh, Leeds, Manchester の5都市が、後者には Birmingham, Sheffield, Liverpool, Bradford, Bristol の5都市が含まれる。本稿では、この言語由来別の分類により、それぞれの都市名の由来と原義について論じ、ついでその都市に由来する姓の有無を英米の代表的な姓の辞典と、ロンドンの電話帳(1978年版と1984年版)で調査した上、十大都市名と姓の関係につき若干の考察を試みようとするものである。

I ケルト系の都市名

ローマ軍が紀元55年にイギリスに侵入した当時 Britain 島に住んでいた民族は大部分が Celts であった。しかし Celts と言っても単一の民族ではなく、ヨーロッパ大陸の諸地方から何回にもわたって Britain 島に渡来したのである。Celts が多様であったことから伺い知ることができる。大別すれば Brittonic (Brythonic) dialects のグループと Goidelic (Gaelic) dialects のグループとなる。前者からは現在の Welsh や Breton が派生しており、後者からは Scotland, Ireland, Isle of Man の Gaelic が生じている⁴⁾。

イギリスの地名の初期の記録はローマ人に支配されていた55 B.C. ~ A.D. 410の時代のもので、大体ギリシャ語からラテン語で言及されている。従ってケルト語の語幹にギリシャ語か

1. 神戸大学医療技術短期大学部
School of Allied Medical Sciences, Kobe University.
1987年7月31日受付, 同年9月30日受理

ラテン語の語尾がつけられているため、ケルト語本来の正確な形の推定がすこぶる困難であった。しかし過去50年間にわたり言語学者が精力的にそれらの地名の解明に取り組んできた結果、完全と言うにはほど遠いが、かなり多くのケルト語由来の地名に新しい解釈が行われるに至っている。とはいえ、十大都市名の中にも由来と原義につき、なお疑義のあるものも含まれている。例えば Edinburgh である。第一要素については Celtic 系とする説と、Old English 説をとる学者に2分されている。本稿では一応ケルト系に入れて分類しているが、全く便宜上の措置であることを断っておきたい。

まず、ケルト語 (Celtic) に由来する London, Leeds, Manchester, Glasgow, Edinburgh の順に取り上げることになろう。

(1) Greater London [lánden]

大ロンドン (Greater London) とは1965年、広域行政のため都市化の進んだ周囲の接続部分を合併させた行政地域のことで、現在のロンドンと同義と考えてよい。すなわち、大ロンドンは City of London (単に City とも言う) と32区 (borough) よりなっており、各区は、いずれも自治性が強い。しかし全域問題にはグレート・ロンドン議会 (Greater London Council) が行政と立法を担当している。

語源的にみると、London はケルト語の **londos* (wild, bold) に遡り、おそらく *Londinos* (「剛勇の者」が原義の部族名または個人名) に属する領地と推定されている。ローマ人は *Londinos* を *Londinium* とラテン語の語尾 (-ium) をつけた地名に変えたが、更に古英期に *Lundenne*, *Lundenburg* のように用いている。中英期には *Lundene*, *Lundin* と一層短縮されて現在の London となるに至っている⁵⁾。

London 姓についてはどうか。アメリカの E. C. Smith の辞典には 'one who came from London in England' と 'one who was learned in Talmudic matters' と2様の解釈が記

されている⁶⁾。前者は「イングランドのロンドンの出身者」であるが、後者は「ユダヤ人の生活、宗教、道德に関する律法に通じている人」の意で、ユダヤ系の姓としている。われわれには *The Call of the Wild* を書いたアメリカの作家 Jack London (本名 John Griffith London) (1876-1916) の名がまず頭に浮ぶのではないだろうか。

P. H. Reaney, *A Dictionary of British Surnames* を引くと、London をはじめ London, Lonnon, Lunnon などの異形の姓も記載されており、988年の Aelfstan on Lundene がもっとも古い記録である⁷⁾。しかし London が姓として用いられることは余りないらしく、Basil Cottle は 'rarish example of a big town as a surname' とコメントしている⁸⁾。とすれば大都市 London が姓として用いられることは珍らしいということになる。1978年と1984年版のロンドンの電話帳を調べてみると、London を冠した会社名などはもちろん何頁にもわたり何百社とあるが、個人の姓としてはそれぞれ53人と51人を数えるにすぎない。Smith の上位2,000姓のアメリカの表にも見当らないから、London 姓の持ち主はごく限られた数と推定されるであろう。大都市と姓の関係について Cottle のコメントは重要なヒントをわれわれに与えており、筆者も十大都市名とそれに由来する姓の全部を検討した後、Bristol の項でこの問題につき、まとめて若干詳しく論じることにした。

(2) Leeds [lí:dz]

England 中北部の West Yorkshire 州最大の都市 Leeds はエア (Aire) 川に面する交通の要衝にあり、羊毛工業の中心都市として知られている。11世紀より市場町として発展し、14世紀にフランドルの毛織物工業が導入され、18世紀にはイギリス最大の毛織物工業地となった。現在は、このほか機械、金属、航空機部品、家具、皮革製品などの工業も盛んな都市である

が、同時にイングランド中北部の文化の中心地にもなっている。

E. Ekwall によれば、730年頃の Bede の記録に *Loidis* とあるのがもっとも古く、British (Welsh や Breton に分かれる前のケルト語) 由来である。示唆に富む記述がなされているので、少し長くなるが引用することにしよう。⁹⁾

[*Loidis* c 730 Bede, c 890 OEBede, *Ledes* DB, 1190 P, *Leedes* c 1185 YCh 1746 f., *Liedes* 1181-9 BM, *Leddes* 1100-8 Fr]. *Loidis* in Bede is the name of a district (*regio*), but the name was later restricted to the chief place in it. The name is British and formed with the same suffix (-*iss*-) as *Lindis* (LINDSEY Li). The original vowel of the first syllable must have been *ō*, which was unmlauted to *æ*, whence *ē*. Possibly the base is **plōd*-, related to Gk *plōtós* 'flowing', OE *flōd*, Goth *flōdus* 'river' and derived from the verb for 'flow' found in Gk *plōō*, OE *flōwan* &c. Leeds would then be 'district on the river (Aire)'.

上例から判断すると、元来は「川畔(エア川)の地域全体を指す名称であったが、後に「その地域の主要なところ」だけを指す名称になったことが判明する。地名にも generalization (一般化) の方向をとる場合(例えば川名から州名に発展したアメリカの Wisconsin や Minnesota) と、specialization (特殊化) の方向をとる場合(例えば上例の Leeds) があって興味深い。

Leeds 姓に目を転じよう。Smith の辞典には 'one who came from Leeds (district on the river) in Yorkshire' と記載されている。¹⁰⁾ ただし上位2,000姓の表に入っていないところを見ると、アメリカでは大姓でないと見てよいであろう。一方イギリスの Cottle の辞典を引くと 'The West Yorkshire city has a Keltic (?) river name once applied to the whole district; Kent place is? loud (stream) O. E.' とあり¹¹⁾ West Yorkshire の Leeds 以外にも Kent 州の Leeds があ

ることになる。後者の場合には Old English 由来と推定している。Cottle の第一版(1967年)の辞典は8,000姓を収録しているだけで、commonest insular names in U. K. and U. S. と断っている。これに対して、第二版(1978年)の辞典では12,000姓を収録しており、増えた姓には rare and odd names が多数含まれていると序文で記している。Leeds は両方の版に見られるが、ロンドンの2種類の電話帳では、それぞれ24人と29人の保持者があるだけで、London 姓よりも少ない。やはり rare surnames に属すると考えられよう。

(3) Manchester [mæntʃester, -tʃis-, tʃes- | tʃistə(r), -tʃes-, tʃes-]

England 北西部の Greater Manchester 州(1974年に新設)の州都が Manchester である。古くはローマ軍の駐屯地で、Edward 三世の頃に来住したフレミング人(Flemish)が羊毛、亜麻工業を導入し、産業革命期からは、綿業の一大中心地となった。しかし現在は、第2次大戦中に被爆して衰退した綿業を中心とした諸工業にかわり、流通、金融の中心地となっている。

地名の第2要素として用いられている '-chester' から分るように、Manchester は昔ローマ軍が駐屯していた名残りを示す地名である。というのは '-chester' は '-caster' と同様、ラテン語の 'castra' に由来し、Old English に入ってから caester, ceaster と変化した借用語であるからだ。原義は 'a city or walled town, originally one that had been a Roman station' である。¹²⁾ 従って、Manchester は Old British の Mamucion + OE ceaster よりなる合成語で、'place or fort on the breast-shaped hills' が原義であると推定されている。¹³⁾ B. Cottle によると、第一要素の Mamucion は O. B. の mammā に基いており、'breast hills' (「胸の形をした丘」) が原義である。¹⁴⁾

Manchester は Smith の辞典では 'one who came from Manchester (place of skins fortification; stone fortification), in Lancashire' と記載されている。¹⁵⁾ 原義を 'place of skins fortification, 又は 'stone fortification' としている点が Cameron や Cottle の解釈と異っているが, Smith の辞典には, 解釈の根拠となる資料や出典が明示されていない。また, Manchester を Lancashire 州に含めているが, 現在は先述の通り Greater Manchester 州に編入されているので注意を要する。Lancashire 州は1974年, Liverpool を含む南西部は Merseyside 州の一部に, Manchester を含む南東部は Greater Manchester の一部に, 北西部は Cumbria 州の一部になっている。

Manchester 姓を Smith の表で調査しても見当たらないし, Cottle の第一版の辞典にも記載されていない。ただし, 第二版には収録されているが, むしろ 'rare and odd names' の部類に属する姓として収録されていると考えられる。2種類のロンドンの電話帳でも20人と23人の Manchester 姓が記されているものの, 670万余の人口をもつロンドンにしては少数である。しかし歴史の古い地名に由来する姓であることは間違いのないと思われる。

- (4) Glásgeu [glá:skou. -gou | glá:sgəu, glá:z-, glá:skəu, glás-, glásgeu, gláz-]

Scotland には Wales 由来の地名がかなり多く見られる。Glasgow も Old Welsh からきている地名で, Scotland 最大の都市である。当市は Strathclyde 州の Clyde 川に臨み, もとは市場町であった。現在も牛肉市場がある。1763年 James Watt (1736-1819) が最初の汽船を建造し, 次いで河口が深く浚渫されてから造船業の一大中心地として発展した。しかし現在は造船, 鉄鋼のほか, 各種機械, 化学, タイヤ, 食品などの盛んな工業都市となっ

ている。

Glasgow は Nicolaisen によると, 早くも1136年に Glasgu と記録されている由で, 'glas' (green) + 'cau' (hollow), すなわち「緑の窪地」を表わす合成語の地名である。元来は自然地勢 (natural feature) を描写した地名であったが, 後に定住村落名 (settlement name) になったと考えられている。¹⁶⁾ 由来に関しては上記のほかに, 「大英和辞典」(第5版, 研究社) は, 'glas' (gray) + 'chu' (hound) もあげている。¹⁷⁾

Glasgow 姓を Smith の辞典で引くと, Scottish name として 'one who came from Glasgow (gray hound; black brook; gray wood), in Lanarkshire' と記載されている。¹⁸⁾ 原義については, やはり出典が明示されていないので判断の基準がなく残念であるが, Glasgow 以外にも Glasco, Glasgoe, Glascoe などの異形の姓も収録されており, 便利な姓の辞典ではある。

G. F. Black の *The Surnames of Scotland* をみると, 姓としては1258年の John de Glasgu がもっとも古い記録である。¹⁹⁾ 従って歴史の古い姓であることは明白であるが, 現在この姓の保持者は少数と思われる。2種類のロンドンの電話帳には Glasgow がそれぞれ39人と38人, Glascoe が一人ずつ載っているだけである。Smith の上位2,000姓の表にも含まれていないし, Cottle の第一版の辞典にも収録されていないところを見ると, Glasgow 姓は rare and odd names に属すると考えてよいのではなかろうか。

- (5) Edinburgh [édinbərə, -bə:(r)ou | édinb(ə)rə, -bá:rə]

Edinburgh の発音と綴字に関しては注意を要する。地名の第二要素として用いられる '-burg' は, スコットランドでは '-burgh' とつづられ, [b(ə)rə] (cf. Newburgh [njú:b(ə)rə] と発音されることが多いからである。

なお、イギリスでは、上記の綴字に対して ‘-borough’ [bərə] (cf. Malborough [mólɒb(ə)rə]), ‘-berry’ [beri] (cf. Rainsberry [réinzberi]) や ‘-bury’ [beri] (cf. Salisbury [sól:lzberi]) の語形が使われている。

エディンバラは周知のように Scotland の首都であるばかりでなく Lothian 州の州都でもある。人工と自然の調和した美しい都市で、「北方のアテネ」の異名がある。当市は617年ごろ標高145mの巨大な火山岩丘上に築かれた城の周囲に発達した町で、1437年Perth (‘thicket’ が原義) に代わり Scotland の首都となった。ただし、城は England との抗争の拠点であった。1603年 James VI世の England 王の兼務、1707年のスコットランドとイングランドの合併後は、その政治的重要性を失うに至っている。

語源的にみると、Edinburgh の第二要素の ‘-burgh’ については学者間で意見が一致している。すなわち、OE ‘burh’ に由来し、‘fortified place, fort’ と解されている。²⁰⁾ もちろん、‘-burh’ には上記以外にも ‘fortified manor, manor, town, borough’ の意味もある。しかしながら、問題は Edinburgh の第一要素である。Edin はケルト語の *Eidyn* に由来と解する学者と、OE の *Eadwine* (prosperity + friend) に由来とする学者があるからである。OE由来説をとる学者は古くから Eduenesburg や Edwinesburg とつづられる記録の残っていることが何よりの証拠で、Edinburg は Northumbria の王であった King Edwin により築かれた城 (fortress of King Edwin) と主張する。この説に対してケルト語説をとる学者は、元来ケルト語の地名であった *Eidyn* に¹²⁾更に Briton 人や Gael 人によってケルト語の *dun* が語頭につけ加えられ、また Angle 人により説明的な ‘-burh’ つけ加えられたと主張する。しかし後者の説をとる学者も *Eidyn* に関しては何らの解釈も提示していないので、Edinburgh がもし「エドウィン(王)の城」を意味しないの

なら、誰も Edinburgh の意味が分らなくなると嘆く学者もいる仕末である。²¹⁾

Edinburgh のもっとも古い記録は Black によると1233-55年の Alexander de Edynburg, と de Edenburg である。1396年には Thomas of Edynburgh 姓も記載されている。²²⁾ 現在では Reaney の辞典に Edinborough, Edenborough, Edinborough, Edinbry, Edynbry の異形の姓が ‘from Edinburgh’ と記されている。²³⁾

一方アメリカの Smith の辞典には Edinburg と Edingbury の2姓が ‘one who came from Edinburgh (fortress of Eadwin; hill-slope fort) in Scotland’ と載っている。²⁴⁾ しかしながら、Edinburgh 姓は Smith の上位2,000姓の表にも、Cottle の第1版と第2版の辞典にも収録されていない。また1978年のロンドンの電話帳でも Edinboro が2人、Edinboroughが3人、Edinburg が1人、Edinburgh が5人、Edingborough が1人で、合計しても12人しかいない。やはり rare and odd names に属する姓と見なしてよいように思われる。

II アングロ・サクソン系の都市名

紀元前55年からローマ帝国の支配下にあった Britain 島は紀元410年にローマ軍が引きあげると、間もなく原住民の Briton 族は Pict 族や Scot 族の進出におびやかされることになった。そこで援軍を北海地方のゲルマン人に求めたことは周知の通りである。5世紀の半ば頃から Jute 族がブリテン島南部の Kent 地方に侵入しはじめたのをきっかけとして、次に Saxon 族が Thames 川から南の地方に、更に Angle 族が Thames 川以北から Scotland との境に至る広大な地域へと続々到着し定住したのである。英語史ではブリテン島へのゲルマン人の民族移動の約450年からノルマン人の英国征服の約1100年頃までの期間を Old English (Anglo-Saxon) 期と稱している。

もっとも初期のころの Anglo-Saxon 語の地名には第一要素に人名をもち、それに ‘-ingas’ (部族、一族が原義) をつけたものが多い。たとえば, Hastings (Hæstingas – Hæsta 一族), Barling (Bærla 一族), Buckingham (Bucca 一族の囲い地) である。次いで ‘-ham’ (囲い地, 家屋敷, 村, 牧場) を人名の後につけた Billingham (Billa 一族の村) や Nottingham (Snot 一族の囲い地の意だが最初の ‘S’ が現在では省略されている) が見られる。次にとり上げる Birmingham, Sheffield, Liverpool, Bradford, Bristol (OE *brycg* + *stow*) の第二要素も OE 系の古い地名であることを示している。

(1) Birmingham [bá:miŋəm | bá:] (英)
[bá:miŋhəm | bá:] (米)

発音に関しては上記のようにイギリスとアメリカでは異っている。わが国でも両者を区別するため、イギリスのそれは「バーミンガム」、アメリカの方は「バーミングハム」と称している。²⁵⁾イギリスの Birmingham はイングランドの中部、ロンドンの北西約160キロの所にあり、West Midlands の中部に位置する人口第2位の大都市である。中世より市場町として発達したが、付近に産する良質の石灰と鉄鉱を背景に産業革命後は急速に発展し、Black County の異名をはせた。鉄鉱業をはじめ金属、自動車、各種機械などの重工業の中心地となった。18世紀後半の Birmingham はまさに新産業のモデルだった。アラバマ州の州都の Birmingham (アメリカ) は、イギリスの産業革命の中心地であった Birmingham にあやかっただけで繁栄を期待し、同じ名をつけたのである。²⁶⁾

Birmingham は Ekwall によると、OE の *Beornmundingaham* に由来し、‘the ham of Beornmund’s people’ (ベオルムンドー族の村) と推定されている。²⁷⁾しかし、‘the direct base may be a pet-form **Beorma* from *Beornmund*’ とも記されている。第2要素の

‘-ham’ は ‘village, estate, manor, homestead’ などの意味をもっているが、もっともよく使用されているのは ‘village’ である由。²⁸⁾

単独で ‘-ham’ が用いられることはなく、また地名、人名の第一要素として使用されることも稀で、殆ど第二要素として用いられている。

Cottle の姓の辞典 (第2版) を引くと、Birmingham は地名姓として ‘homestead of the family of an (AS called)? Warrior/Protector’ OE, the Warwickshire City.’ とある。²⁹⁾とすれば第一要素の人名の Beornmund は「守護者」または「戦士」の原義をもつと考えられる。アメリカの Smith の辞典には ‘One who came from Birmingham (the village of Beornmund’s people), a city in Warwickshire [wórikʃiə]’ と記されているが、³⁰⁾姓の上位2,000の表にはない。また、Cottle の第一版の辞典 (1967) にも記載されていない。2種類のロンドンの電話帳でも34人を数えるだけである。由緒ある地名姓ではあるが、珍らしい姓の部類に属するものと思われる。

(2) Sheffield [ʃéfi:ld, -fild]

当市はイングランドの中北部の州である South Yorkshire 州の州都で Don 川と Sheaf 川の合流点に位置し、上記のバーミンガム市の北北東約100キロのところにある。ヨークシャー炭層中の鉄鉱、ペニン山脈からの水力、木炭、砥石などにより早くから刃物生産が行われ、刃物工業の中心地として知られている。特殊鋼や銀器の生産でも有名であるが、煙害の少ない工業都市としても知られている。

Ekwall によると、West Yorkshire 州の Sheffield は ‘*Feld*’ on River Sheaf’ とある。Domesday Book には Scafeld, 1184年には Sadfeld と初期の記録にある由である。³¹⁾OE の ‘*feld*’ は現代英語では ‘field’ で、地名要素としては ‘open country’ ‘cleared space in woodland’ の意味で人名の後に用いられることが多い。たとえば Bassingfield

(Bassa's people) や Finchingfield (Finc's people) である。しかし時には附近の川の名にちなんで open land が名付けられることもあり、この West Yorkshire の Sheffield を Cameron は例にあげている³²⁾。従って「シーフ川畔の開かつ地」が当市の原義であると考えられる。ただしイングランドには上記の Sheffield 以外にも Berkshire 州と Sussex 州にそれぞれ Sheffield がある。Berkshire のそれは OE *sceo* 'shelter' + OE *feld* 'open country' と考えられ、Sussex のそれは OE *scip* 'sheep' + OE 'feld' の合成地名と考えられる³³⁾。従って、それぞれ第一要素が異っていることに留意を要する。なお、Cottle の辞典では Sheffield の Sheaf を 'River Sheaf (=boundary)' と記されており、Sheaf が元来「境界線」の意味をもっていたことが判る³⁴⁾。Smith の表を見ると、Sheffield 姓は 1,665位で、アメリカでは 17,136人の保持者がいると推定されている³⁵⁾。アメリカでもトップ 2,000姓の中に入っているわけであるから、かなりの大姓である。しかし上述のように、この姓には Berkshire や Sussex 州の Sheffield に由来するものも総合されて大姓となるに至ったと考えられる。従って、West Yorkshire 州の Sheffield 由来の姓だけを、この保持者数の中から特定することは不可能なことである。同様のことは、後で取り上げる Bradford についても当てはまる。かりに West Yorkshire の Sheffield 姓を特定できたとしても、恐らく単独では大姓にならないであろうと推測される。

ところでロンドンの電話帳 (1978) を見て驚いたことに、この姓の持主はたった29人しかいない。Cottle の第一版の辞典に含まれているから一般的な姓に違いないが、予想に反して意外に少ない。たまたまロンドンの在住者が少ないということで、イギリス全体としてはかなりの保持者があるものと考えられるが、遺憾ながら、アメリカの Smith の表のように正確な姓の統計表が未だにイギリスでは発表されてい

ない。

(3) Liverpool [lívəpʊ:l | -və-]

イングランドの北西部にある Merseyside 州の州都 Liverpool は、Mersey 川河口 (三角江) 右岸の大港湾都市であり、Manchester の西南西約48キロのところに位置している。当市は Henry 二世 (1154-89) が12世紀後半に町と城をつくり、John 王が開港、16世紀にはすでに奴隷貿易をしていた。18世紀に新大陸、西アフリカとの三角貿易で栄え、また産業革命とともに発展した。第二次大戦中被爆したが、自動車、電機、化学、食品などの工業が発達している。現代の日本人には1950年代から1960年代にかけて世界中の若者の心をとらえた Beatles の音楽の発祥地としてよりよく知られていることであろう。

語源的にみると、Liverpool は OE '*lifrig*' (thick water) + '*pool*' (stream or pool) で、「濁った水の流れ」又は「濁った水たまり」が原義であろうと推定されている³⁶⁾。Ekwall によれば、'Liverpool was originally the name of the Pool, a tidal creek, now filled up' とある³⁷⁾。すなわち、現在ではふさがっているが、元来は満潮時にだけ海水が入ってくる川の淵の名称であった。しかし一方では 'the old name of one of the streams that fell into the pool' であるかも知れないとし、もしそうであるならば Norway の '*lifra*' (stream with thick water) と同じであると言及している³⁸⁾。なお、OE *pool* には 'pool, deep place in a river' と 'tidal stream' の意味があり、Poolham, Poolhampton, Poulton, Hampole などの地名にも用いられている。ついではながら、アイルランドの首都 Dublin の原義は 'black pool' である³⁹⁾。

Liverpool 姓に目を転じよう。残念ながら、Cottle の第一版にも第二版の辞典にも収録されていないし、Reaney のそれにも見当たらない。ということは、一般的な姓でないということをし

意味している。ただし、アメリカの Smith の辞典には ‘one who came from Liverpool (pool with thick water), in Lancashire’⁴⁰⁾ とあるが、上位2,000姓の表にはない。2種類のロンドンの電話帳を見ても、わずかにそれぞれ7人と9人を数えるのみである。やはり rare and odd names の部類に属すると見てよいであろう。

(4) Bradford [bráðdfəd | -fəd]

West Yorkshire 州の工業都市 Bradford は、Leeds の西15キロのエア (Aire) 川の支流に立地し、Worsted 織物生産で世界的に知られている。中世より半毛工業が行われたが、産業革命後は立地条件の優位から急速に発展し、現在は電機工業も盛んで、人口46万余を有するイギリス第7位の大都市となっている。

Bradford は OE brad ‘broad, wide’ + OE ford よりなる合成地名で、「巾の広い大きな浅瀬」が原義である。⁴¹⁾ 第一要素の brad は形容詞で Broadwell ‘broad stream’ や Bradley ‘broad meadow’ などの地名や人名にも使用されており、第二要素の ford も Cranford ‘cranes’ ford’, Oxford ‘ford for oxen’ や Shefford ‘sheep ford’ などの地名に多用されている。Bradford のもっとも古い記録は1086年の Domesday Book に記載されているが、Bradeford とつづられている。⁴²⁾ ところで地名としての Bradford は West Yorkshire 州だけでなく、Dorset 州や Somerset 州などの7つの county でも地名として使用されているので注意が必要である。⁴³⁾

地名同様に、姓としても Bradford は古くから多用されている。イギリスの十大都市名の中では Bradford 姓がもっとも多く使われている。なぜなら、アメリカの Smith の上位2,000姓の表を見ると Bradford は565位で、約45,920人の保持者がいるからである。⁴⁴⁾ 十大都市名由来の姓のうち Smith の表に入っているのは、この Bradford と前述の Sheffield

(1,665位) だけである。この2つの姓だけは他の十大都市名由来の姓と異り、アメリカでは大姓であると断言できよう。しかしながら、問題がないわけでない。Sheffield の場合と同様、Bradford には West Yorkshire 以外の Bradford の出身者も含まれており、それらを合計して大姓になると考えられるからである。更に、アメリカの統計にはイギリスだけでなく、イギリスの旧植民地の Bradford からの出身者のことも考慮に入れなければならないであろう。従って、第7位の Bradford 由来の姓だけを抽出するなら（現実には不可能なことだが）、恐らく大姓にならなかったと思われる。

参考までにロンドンの2種類の電話帳によると、Bradford 姓の保持者は186人と191人である。Sheffield の場合ほどではないが、筆者の期待を裏切る数字である。たまたまロンドンの在住者が少ないというだけで、Cottle の第一版の辞典や Reaney の辞典にも記載されているから一般的な姓であることは間違いないと思われる。このことは、地方によって姓が偏在する可能性のあることを示唆するものであり、電話帳による統計は、全国を網羅したものではない限り、調査方法としては余り正確さを期待できないということでもあろう。

(5) Bristol [brístl]

イングランド南西部のAvon 州の州都 Bristol はAvon (Welsh *afon* ‘river’) と Frome (Welsh adj. *ffraw* ‘fair, brisk’) の合流点にあり、Avon 潮河港で、London, Midlands, Wales, Cornwall 諸方向との結合点にあっている。古くからの商業都市で中世にはアイルランド島の交易で栄え、15~16世紀にはロンドンに次ぐ港湾都市であった。しかし産業革命後、後背地の羊毛工業が West Yorkshire に競争できず、港もまた Liverpool に地位を奪われた。現在は印刷、化学、製紙、機械、航空機工業が盛んである。

Ekwall によると、地名としては早くも1063

年に Brycgstow, 1169年には Bricstou が見える由である。⁴⁵⁾ Bristol は OE *brycg* ‘bridge’ + OE *stow* ‘place’ よりなる合成地名で, ‘the site of the bridge’ (橋地, 橋のかかっているところ) が原義である。第一要素の *brycg* は Brigham (‘village by the bridge’), Brigley (‘grove by a bridge’) などの地名に, 第2要素の *stow* も Churchstow (‘place of a church’) や Burstow (‘place of a fort’) などの地名に ‘place’ の意味で多用されている, ありふれた地名要素である。

Reaney の姓の辞典を引くと, Bristol, Bristoll のほかに, Bristow, Bristowe, Bristo, Brister の異形の姓が記載されている。ただし, ‘the form in common use until at least the 16th century was *Bristow*. The modern Bristol is scribe’s Latin.’ と興味深い記述がなされている。⁴⁶⁾ Scribe’s Latin とは印刷術の発明前に, 写本を筆写した職業的な筆写者が使用していたラテン語という意味で, 元来は Bristow であったことが判明する。

アメリカの Smith の辞典には Bristol, Bristow 以外に Bristoe, Bristle の姓が ‘One who come from Bristol (the site of the bridge) in Gloucestershire’ として載っている。⁴⁷⁾

1974年に Bristol は Avon 州の一部となり, その州都となっているから注意を要するが, イギリスでもアメリカにおいても, いわゆる ‘town name’ に由来する姓は, 元来その町の名と同じスペリングであったものが, その町名が変化するにつれて姓も徐々に変化したことを上例は物語っていると考えられる。しかし, ロンドンの電話帳 (1978年) を見ると, Bristo (1人), Bristol (9人), Bristoll (1人), Bristow (190人), Bristowe (1人) で合計 207人のうち, 歴史の浅い Bristol (9) に対し, 歴史の古い元の Bristow は数の上で 190と圧倒していて興味深い。地名を姓にする

にしても歴史的に古い方が好まれるように思われる。

ところで Cottle によると, Bristol 姓について, “Corrupted by the familiar city-name but cities rarely give surnames, the citizens staying put and not taking them elsewhere”. とコメントしている。⁴⁸⁾ 先述の London の項におけるコメントと合わせて考えるならば, 大都市名が姓として使用されることは余りなかったのではないと思われる。アメリカにおける姓の上位 2,000 姓の表に Bristol や Bristow を見出すことができないのは, むしろ当然ということになろう。Cottle はその理由として都市の住民はその都市にじっとして (staying put), どこか他の場所に行くことが先ずないからだと言う。

中世時代のイングランドにおける人々の移住については C. M. Matthews も鋭い指摘をしている。⁴⁹⁾ すなわち ‘The general movement was always from country to town, and from small towns to larger ones, the truth of which is demonstrated by the very small numbers of London as a surname.’ と述べている。人々の移住は「田舎から町へ」, 「小さな町から大都市へ」であったという。London 姓の保持者が極端に少い (筆者の調べたロンドンの 2 種類の電話帳では 53 人と 51 人である) ことが何よりの証拠であるとしている。大都市と姓の関係について Matthews の見解は誠に明快で説得力がある。

Matthews は, また, 中世時代の多くの重要なイングランドの都市, 例えば London をはじめ York, Lincoln, Norwich [nɔ(:)ridʒ] などはすべて東側 (East side of England) にあり, Bristol だけが例外という。従って, 中世時代における田舎から都市への移住は, 北部や西部から南部と東部へ向っての移住が主流で, 断じてこの逆ではなかったと喝破している。その証拠に姓の点から見ても North 姓が 500 に対して South 姓は 70 しかなく, 同様に West 姓の 700 に対して East 姓はわ

ずか110しかない興味深い事実を指摘している。⁵⁰⁾なお、イギリスにおける姓の形成期が10～15世紀の、いわゆる中世時代であったことも、地名と姓について考える場合、看過することのできない重要な視点であろう。

Matthews といい、Cottle といい、両者の見解は明快で的をえていると考えられる。イギリスの十大都市名の由来を辿り、それぞれの都市名の姓への影響を主としてアメリカは E. C. Smith の上位2,000姓の表と同著者の辞典、イギリスは B. Cottle の第一版と第二版の姓の辞典、P. H. Reaney の姓の辞典、ならびに1978年と1984年版の London Telephone Directory を中心に検討した結果、はからずも Matthews, Cottle の見解を裏付けることになった。もちろん、上記の電話帳はイギリスの全人口の一割強をカバーしているにすぎないから、確度の点からは、必ずしも高いものでないことは先述の通りである。しかしながら、各種の辞典や Smith の表から大局的、総合的にイギリスの十大都市名由来の姓を見ると、Bradford や Sheffield のような特別考慮すべき問題をもつ都市もあるが、十大都市名の姓への影響は、ごく僅小であると判断して間違いはなかろうと考えられる。

結 語

イギリスの十大都市名をアメリカの地名辞典、例えば K. B. Harder, *Illustrated Dictionary of Place Names, United States & Canada* (1976) を引いてみると、Liverpool を除くすべてが記載されている。London が2, New London が4, Birmingham が6, Glasgow が2, Leeds が1, Sheffield が1, Manchester が5, North Manchester が1, Edinburgh が2, Bristol が9, Bradford が2といった具合である。ただし、Liverpool も昔は Ohio 州にあったが、現在は消えてなくなり、East Liverpool が一つ残っているだけである。また上記のうち、

Bradford だけはアメリカ人の人名に由来しているが、他はイギリスの都市名にちなんで命名されている。⁵¹⁾

すでに見てきたように、イギリスの十大都市名由来の姓をアメリカの姓の辞典、例えば E. Smith の *New Dictionary of American Family Names* (1973) を引くと、すべて載っている。このうち、Smith の上位2,000姓の表によれば、Sheffield 姓は1665位 (7,136人) Bradford 姓は565位 (45,920人) を占めており、いわば大姓となっている。アメリカには少くとも百万以上の姓があると推定されているから、上位2,000姓に入っていることは大きな意味をもっている。しかし、イギリスの十大都市名由来の Sheffield と Bradford 姓に限定するならば、恐らく Smith の表には入らなかったであろうと思われる。とは言え、地名といい、姓といい、英米の両国は、強い文化的絆で結ばれていることが判明して興味深い。

ところで、本稿ではイギリスの十大都市名を言語由来別に分類し、それぞれの都市名由来の姓との関係を英米の辞典などを参考に若干の考察を試みてきた。その結果、次の二点が明らかになったと考えられる。

まず Bradford と Sheffield を除くと大姓になっている姓はないと云えよう。むしろ残りの8姓の保持者は僅少で、rare and odd names の部類に属している。地名を姓に転用することはイギリス人の姓の半分近くに見られるが、大都市名を姓にすることは余りなかったと思われる。アメリカの第一の都市 New York を姓にする人や、わが国の首都の東京を姓にする人も殆どいないであろう。世界有数の大都市である両市で、New York や東京姓を名乗る人が多勢いると仮定すれば、恐らく自他を区別する姓名の第一義的機能が消失してしまうことであろう。

次にイギリスの十大都市名がすべてケルト語由来か、アングロ・サクソン語由来という点に表われているように、中世時代からの古い歴史をもっていることである。歴史の古い小村から

町や都市へその村民が移住した場合、自らの出身地を示す元の村名を名乗ったとしても自然なことから考えられるが、歴史の浅い地名を姓に転用することは殆どなかったと思われる。地名を姓とするにしても、かなりの歴史を必要としたのではなかろうか。Bristow と Bristol が、この間の事情をよく示していると思われる。歴史の古い元の Bristow 姓の保持者数をロンドンの電話帳（1978）では190人みられるのに対し、Bristol は9人しかいない。筆者の住む神戸市の電話帳（1987年）を調べてみても、歴史の古いカンベ（神戸）姓は54人であるのに

対し、比較的歴史の新しいコウベ（神戸）を名乗る人は2人だけである。恐らく「江戸」姓を名乗る人は歴史の浅い「東京」姓より、はるかに多いのではないかと思われる。姓ということになると、洋の東西を問わず、やはり歴史的に古くて重みのある方を人は好む傾向が強いと言えるのではなかろうか。

参考までに、Greater London の City と32 boroughs の名称と面積、ならびにイギリスにおける上位33都市名と人口およびその州名を記しておこう。

表1 グレーター・ロンドンのシティと32区

ロンドン・シティと32区 (ABC順)	面積 (km) ²	人口(千 1977推)	ロンドン・シティと32区 (ABC順)	面積 (km) ²	人口(千 1977推)
0) City of London シティ・オブ・ロンドン (ロンドン・シティ)	2.6	5.6	20) Kingston upon Thames キングストン・アポン・テムズ	37.6	136.4
1) Barking バーキング	40.0	153.0	21) Lambeth ランベス	27.2	282.9
2) Barnet バーネット	89.4	292.2	22) Lewisham リューシャム	34.7	243.8
3) Bexley ベクスリー	64.5	214.7	23) Merton マートン	37.8	165.8
4) Brent ブレント	44.3	255.5	24) Newham ニューアム	37.6	229.7
5) Bromley ブロムリー	158.8	293.1	25) Redbridge レッドブリッジ	56.5	229.0
6) Camden カムデン	21.8	189.3	26) Richmond upon Thames リッチモンド・アポン・テムズ	56.5	165.1
7) Croydon クロイドン	96.3	321.9	27) Southwark サザック	29.8	224.1
8) Ealing イーリング	55.4	291.9	28) Sutton サットン	43.3	166.7
9) Enfield エンフィールド	81.1	260.5	29) Tower Hamlets タワー・ハムレッツ	20.2	150.3
10) Greenwich グリーニッチ	49.2	206.2	30) Waltham Forest ウォルサム・フォレスト	39.6	221.8
11) Hackney ハックニー	19.4	194.0	31) Wandsworth ウォンズワース	40.0	278.3
12) Hammersmith ハマースミス	16.1	163.9	32) Westminster, City of シティ・オブ・ウェストミンスター	21.5	209.9
13) Haringey ハリンゲー	30.3	227.9			
14) Harrow ハロー	50.8	198.9			
15) Havering ヘイヴァリング	119.9	240.4			
16) Hillingdon ヒリンドン	110.3	229.0			
17) Hounslow ハウンズロー	59.5	200.0			
18) Islington イズリントン	15.0	168.4			
19) Kensington and Chelsea ケンジントン・アンド・チェルシー	11.9	159.5			
			合 計	1,580	6,970.1

表2 人口25万以上の都市と地区
(ただし人口は1979年ロンドンの戸籍本署長官により公式発表された推定数)

順位	都市名	州 名	人口・
1.	London	Greater London	6877 100
2.	Birmingham	West Midlands	1033 900
3.	Glasgow	Southclyde	794 316
4.	Leeds	West Yorkshire	724 300
5.	Sheffield	South Yorkshire	544 200
6.	Liverpool	Merseyside	520 200
7.	Manchester	Greater Manchester	479 100
8.	Bradford	West Yorkshire	461 600
9.	Edinburgh	Lothian	455 126
10.	Bristol	Avon	408 000
11.	Kirklees	West Yorkshire	379 100
12.	Belfast City	North Ireland	354 400
13.	Wirral	Merseyside	342 300
14.	Coventry	West Midlands	339 300
15.	Wigan	Greater Manchester	311 200
16.	Wakefield	West Yorkshire	309 700
17.	Sandwell	West Midlands	306 900
18.	Sunderland	Tyne and Wear	300 800
19.	Sefton	Mersyside	300 700
20.	Dudley	West Midlands	296 000
21.	Stockport	Greater Manchester	291 700
22.	Newcastle-upon-Tyne	Tyne and Wear	287 300
23.	Doncaster	South Yorkshire	286 500
24.	Cardiff	South Giamorgan	282 000
25.	Nottingham	Nottinghamshire	278 600
26.	Leicester	Leicestershire	276 600
27.	Kingston-upon-Hull	Humberside	274 500
28.	Walsall	West Midlands	263 400
29.	Bolton	Greater Manchester	260 100
30.	Wolverhampton	West Midlands	258 200
31.	Stoke-on-Trent	Scaffordshire	257 200
32.	Plymouth	Devon	255 500
33.	Salford	Greater Manchester	252 600

Norris Mcwhirter, *Guiness Book of Answers 1982* (4th edition), p. 220

文 献

1986 (Houghton Mifflin Company, Boston, 1986. 39th edition), p. 281

1 Johnson O: *Information Please Almanac*,

2 Mcwhirter N: *Guiness Book of Answers*

- 1982 (4th edition), p. 220
- 3 McWhirter N: *Op. Cit.*, p. 220
 - 4 Field J: *Discovering Place-names* (Shire Publishing Publications Ltd., Aylesbury 1980), p. 8
 - 5 Ekwall E: *Concise Oxford Dictionary of English Place-Names* (Clarendon Press, Oxford, 1977) s.v. "London."
 - 6 Smith E: *New Dictionary of American Family Names* (Harper & Row Publishers, New York, 1973), s.v. "London."
 - 7 Reaney P: *A Dictionary of British Surnames* (Routledge & Kegan Paul, London, 1976), s.v., "London."
 - 8 Cottle B: *Penguin Dictionary of Surnames* (Penguin Books Ltd., London, 1967 & 1978), s.v. "London."
 - 9 Ekwall E: *Op. Cit.*, s.v. "Leeds."
 - 10 Smith E: *Op. Cit.*, s.v. "Leeds."
 - 11 Cottle B: *Op. Cit.*, s.v. "Leeds."
 - 12 Ekwall E: *Op. Cit.*, s.v. "ceaster."
 - 13 Cameron K: *English Place-Names* (B. T. Batsford Ltd., London, 1977), p. 36
 - 14 Cottle B: *Op. Cit.*, s.v. "Manchester."
 - 15 Smith E: *Op. Cit.*, s.v. "Manchester."
 - 16 Nicolaisen W: *Scottish Place-Names* (Batsford Ltd., London, 1976), pp. 172-177
 - 17 Koine Y et al: *New English-Japanese Dictionary* (Kenkyusha Ltd, Tokyo, 1980), s.v. "Glasgow."
 - 18 Smith E: *Op. Cit.*, s.v. "Glasgow."
 - 19 Black G: *Surnames of Scotland* (New York Public Library, Readex Books, New York, 1974), s.v. "Glasgow."
 - 20 Ekwall E: *Op. Cit.*, s.v. "burh."
 - 21 Field J: *Op. Cit.*, pp. 35-36
 - 22 Black G: *Op. Cit.*, s.v. "Edinburgh."
 - 23 Reaney P: *Op. Cit.*, s.v. "Edinburgh."
 - 24 Smith E: *Op. Cit.*, s.v. "Edinburgh."
 - 25 小林・徳文編: 新版世界地名辞典, (西洋篇) 東京堂, 1980, p. 392
 - 26 Asimov I: *Words on the Map* (Houghton Mifflin Company, Boston, 1962), p. 28
 - 27 Ekwall E: *Op. Cit.*, s.v. "Birmingham."
 - 28 Ekwall E: *Op. Cit.*, s.v. "OE. ham."
 - 29 Cottle B: *Op. Cit.*, s.v. "Birmingham."
 - 30 Smith E: *Op. Cit.*, s.v. "Birmingham."
 - 31 Ekwall E: *Op. Cit.*, s.v. "Sheffield."
 - 32 Cameron K: *Op. Cit.*, p. 193
 - 33 Ekwall E: *Op. Cit.*, s.v. "Sheffield."
 - 34 Cottle B: *Op. Cit.*, s.v. "Sheffield."
 - 35 Smith E: *American Surnames* (Chilton Book Company, Philadelphia, 1972), p. 322
 - 36 Cameron K: *Op. Cit.*, p. 168
 - 37 Ekwall E: *Op. Cit.*, s.v. "Liverpool."
 - 38 Ekwall E: *Op. Cit.*, s.v. "Liverpool."
 - 39 Field J: *Op. Cit.*, p. 32
 - 40 Smith E: *Op. Cit.*, s.v. "Liverpool."
 - 41 Ekwall E: *Op. Cit.*, s.v. "Bradford."
 - 42 Ekwall E: *Op. Cit.*, s.v. "Bradford."
 - 43 Cottle B: *Op. Cit.*, s.v. "Bradford."
 - 44 Smith E: *American Surnames* p. 308
 - 45 Ekwall E: *Op. Cit.*, s.v. "Bristol."
 - 46 Reaney P: *Op. Cit.*, s.v. "Bristol."
 - 47 Smith E: *Op. Cit.*, s.v. "Bristol."
 - 48 Cottle B: *Op. Cit.*, s.v. "Bristol."
 - 49 Matthew C: *English Surnames* (Weidenfield & Nicolson, London), p. 299
 - 50 Matthews C: *Op. Cit.*, p. 300
 - 51 Harder K: *Illustrated Dictionary of Place-Names, United States & Canada*, (Van Nostrand Reinhold Company, New York, 1976), s.v. "Bradford."

Names of the Ten Biggest Cities in the United Kingdom—Their Origins and Influence upon British and American Surnames

Masashi Kimura

ABSTRACT: According to *the 1986 Almanac* published by Houghton Mifflin Company, the ten biggest cities in the United Kingdom are London, Birmingham, Glasgow, Leeds, Sheffield, Liverpool, Bradford, Manchester, Edinburgh and Bristol. The names of these cities are linguistically classified into two groups for convenience' sake; names derived from Celtic and names from Old English. London, Glasgow, Edinburgh, Leeds and Manchester belong to the former, while Birmingham, Sheffield, Liverpool, Bradford and Bristol belong to the latter. This indicates that they have long and complicated histories behind their names.

Surnames derived from these ten city-names are all found both in the United Kingdom and in the United States. However, in terms of their influence upon British and American surnames, they have given little influence upon them. Although Bradford and Sheffield rank 565th and 1665th respectively in the Smith's list of the 2000 commonest surnames in the U. S., they include many surnames derived from several name-sakes in other counties in England. Thus these two are considered exceptional and as such, require special attention.

Surnames derived from the larger cities are not so common in proportion to the size of their populations as those from smaller places for two reasons: (a) movement of the population was always from country to town, and (b) men gravitated to the important cities rather than away from them. The small numbers of the surnames derived from the ten biggest cities except two seem to confirm this view.

Key Word: City-names,
Ten Biggest Cities in the U. K.,
Origins,
British and American Surnames.